
ショートショート他

和泉あらた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショートショート他

【著者名】

和泉あらた

N2190Z

【あらすじ】

テーマに沿つた超ショートショートホラーとか、途中で諦めた小説の仮置き場。ジャンルや傾向は様々、オカルト・ホラー・スプラッタ風味。一つにつき、500字～1200字程度。

いたづら？『壁アート』

今日は寝ないつもりだった。

小さな物音にも耳を澄まし、何かあれば即警察に連絡してやる、
と。

昨日塗つたばかりの家の壁。

今まで幾度となく落書きされて、その度に塗り直して来た。

書いている本人はアートのつもりなのかも知れないが、家の持ち主からしたら立派な犯罪だ。

自分で塗り直すとムラが出るから隙を『』えるのかも知れないと思
い、今回は業者に依頼してみた。

この綺麗に塗られた壁に落書きをするような、本当に最低やろ
うである事は間違いない。

けれど次に気付いたのは、横で朝食の準備に起き上がる妻の気配
だった。

小鳥のさえずりを聞きながら、妻を追い越し玄関に出る。

ああ、やはりやられていた。

まだ完全に乾いていなかつた壁の一面には無数の手形がついてい
た。

ガツクリと肩を落とす。

それでもそのままにしておくわけには行かない。

昨日せっかく塗つてくれたのに、こんなのは見せるのは申し訳ない、
いと、今日はまた違う業者に依頼をした。

無数の手形でいたづらされた壁を見せる。

すると業者は

本当に塗つてしまつていいんですか？

と聞いてきた。

おかしな事をこつものだ。

近所の田もあるし、手形を残したままにするわけにも行かないのはわかるだろう。

それともこの状態で一度警察に見せた方が良いのだろうかと少し悩む。

その様子を見て業者は再び口を開いた。

これはある意味アートですよ。だって全ての手形が違う人のものなんですから。

いたづら？『悪趣味な遊び』

この時期の新幹線はやたらと混んでいた。

喫煙席を取ればこの混雑から少しばかり逃れられたのだが、

しかし禁煙を始めたばかりの身。

歩きタバコをしている人の煙が香っただけでも、吸いたい衝動がでてしまうのだから、喫煙車両などに乗つたら我慢など出来なくなってしまう。

通路側しか残っていなかつた三人掛けの席には親子連れが座つて居て、窓際には小学校に入る前ぐらいの小さな男の子。

間には疲れた様に眠る母親が座つて居た。

男の子はいたづら盛りといった感じで、子供特有の意味不明の奇声を上げたり、アナウンスを繰り返して見たりと大忙しだ。

それでも楽しいのであろう事は伝わってくる。

横の通路をドタバタと走りながら同じように奇声をあげる子供に呆れながら、ヘッドフォンの音量を最大にし眠りについた。

ふと、もたれ掛かってくる感触で目を覚ます。

横で眠っている男の子の母親である事はすぐわかる。

肩の力で押し返すが、程なくしてまたもたれ掛かる感触。

「どうがなーいな」と田をやると、いたづらうつむぼく笑ひ野の子と田があつた。

両手は母親に添えていて、こちらに倒してきているのだとわかる。

もうすぐ終着駅だ。

しばらぐの間だけだと、その悪趣味な遊びに付き合つてあげる事とする。

二人の間で右に左に揺れる母親。

肩で押し返すと、無邪気に笑いながら両手でまた倒してくれる。

新幹線を降りる頃には、男の子は満足したらしくバイバイといい笑顔で手を振つて見送つてくれた。

これから母親なしで生きて行くことになるとは、まだ知らないままで。

いたづら？『はみ出た傘』

“トウルルルルル……”

“扉が閉まります。ご注意ください”

そのアナウンスを聞きながら、エスカレーターを駆け上がる。

“プシュー”

“駆け込み乗車はお止めください！”

そのアナウンスを聞きながら、閉まりかけた電車に乗り込む。

濡れかけの長い髪を整えながら、ドアにもたれかかる。

「これからは準急で終点までこいつの側のドアは開かない。

もう少し、後五分とは言わない。

せめて一分でも家を早く出れば、こんな息を切らす必要はない。

けれど玄関前の全身鏡を見た途端、服を着替えたくなつたのだ。

別に今日の夜デートが待つていてるわけではないけれど、コーディネートを間違えた日は一日席から立つのさえ嫌になるのだ。

乱れた息のまま音楽でも聞こうとした時、左手に持つた傘に違和感を感じた。

ああ、またやられた。

良くやるのだ。バックとか髪の先とか。

それにしても今日は酷い。

傘の半分以上が扉から外に出てしまっている。

周りからなるべく見えないよう、でも力強く引っ張るが抜けない。

めざとく見つけた私立小学生の笑い声を聞きながら、終点まで潔くこのまま諦めることにした。

次の駅で人が大量に乗り込んできて、私は仕方なしに傘の横に身を寄せた。

その時さつき笑っていた小学生が、むき出しの傘をさらに外に押し出したのだ。

もう二つ側には傘の柄のみしか残っていない。

走り出すと同時に電車の外に出た傘は開いて、台風の時みたいに逆になつている。

今にも骨組を覆つたビニールの部分が吹き飛びそうに、すごい音でバサバサと揺らめいている。

何てことをしてくれたのだ、と小学生を思わずみると、さすがに

いたづらが過ぎたのだと気付き口を開いて固まつている。

「のまあじや、やっぱー。次のホームを通り過ぎる前に何とかしなければ。

狭い車内でもがむしゃらに引っ張ると、開いて細くなつた傘はほんの少しだけ戻つて来たけれど取れかけたビニールの部分が風を受け抵抗が凄い。

もうすぐホームだ、誰も近くにいないでと思つた時に、私はドアに跳ね飛ばされた。

後ろにいたサラリーマンが代わりに傘に手を伸ばしてくれたのだ。

しかしもう遅かった。

私は押し付けられた窓越しに電車が混んだホームに滑り込むのが見えた。

耳につづむく様な悲鳴と、窓越しの血飛沫とともに。

いたづら？『机の下を出し』

家に居たら何をするかわからないうからと、ママは必ず『飯の買い物に僕を連れて行く。

前にお留守番の時に、ペットのウサギにまつれん草を上げたのを、怒っている様だった。

けれどお菓子売り場の前で座って居ても、何かを買ってくれるわけではない。

僕はすぐに飽きて広いスーパーの中を一人で探検していた。

その時、“見切品”と書かれた赤いシールがたくさん貼られた紙を見つけた。

“みきりひん”と言つのは、古くなったり売れ残つたりしたものを見つけてかえつていいいらしい。

ママはいつもこのシールが貼られたものを手にとるけれど、絶対カゴには入れなかつた。

僕はこのシールをこいつたり貼つてしまつことにした。

たくさん入つたお寿司のセット、じゃなくてかんぴょう巻。

分厚いステーキ、じゃなくて豚の挽肉。

マグロの刺身じゃなくて、魚のアラ。

ばれない様に、慎重に、ちょいちょい良いものを選んで。

そして、お菓子売り場にいた人気者のミキちゃん、じゃなくて入り口でボッ一としていた暗いコウノ。

次の日から、コウノは幼稚園に来なくなつた。

僕の願い通りになつたのだ。

まだシールは僕の机の引き出しにたくさん閉まつてある。

いたづらへ『せんぶつ茶』（煎餅茶）

恐ことこうが汚ごです。迷つたけびのせてみました。

いたづら？『せんぶつ茶』

苦手といつか、嫌つてゐる取引先のやつがいた。

もう数年前から、うちの会社に出入りしている印刷屋の若い男なのだが、ねつちここといつか何といふか気持ちが悪いのだ。

女性が言つよつた、生理的に受け付けないとつ感覺なのだろうか。

機嫌を取らなきやいけないから、あんな口調になるのだろうけれど、最近はオカマじやないのかとも疑つている。

安いから使つてしまつただれど、打ち合わせのたびに嫌な気分になるのだった。

「もうこれ以上は、引けないですよ～。会社にかれなくなつちやいます～」

「ああ、わかつた、そこまで負けてくれたら有難いよ。それで見積もり作つて」

「はあい、じゃあ明日もつて来ますねえ～」

ああ、イライラする。もつと男らしくハツキリ喋れないものなのだろうか、と。

そんな時、僕は良いいたづらを思い付いた。

「うちの会社は女性事務社員が少なく、効率をあげるために来客へのお茶は自分で出すことになつてた。

確か、誰かがテレビで見て遊びで買ったせんぶり茶が残つていて、「自由でどうぞ」と置いてあつたはずだ。

俺はそれを少量、普通のお茶に混ぜて出して見た。

しかしオカマの印刷屋は、最初の一囗は多少苦しそうな顔をするのだけれど、結局全て嬉しそうに飲み干してしまつた。

俺はその笑顔がまた気持ち悪くて、やつがくるたびに少しづつせんぶり茶の割合を増やしていった。

そんなある日、同僚との飲み会でやつの話がでた時に、あり得ない事を聞いた。

「おまえ、あのオカマの印刷屋をそつちの意味で気にいつてるんだつて?」と。

「うわせらへんに接待を受けた時に聞いたらしい。

ふざけた噂をたててくれたものだ。

俺はもう一度とせつに頼まない。

なぜ印刷会社を変えたのだと上司に聞かれたら、事情をはつきり話してやる覚悟もあつた。

他部署の仕事できていた印刷屋を捕まえる。

「あんた、何か変な噂を流してくれたみたいじゃないか。俺はそんな趣味はない」

かなりの必死の形相で食つてかかっていたはずなのに、やつはケロリとしている。

「だつて、お密さん、私のお茶に違つものを混ぜてこたでしょ?」

「ああ、だからじつしたんだよ」

「そうだ、お前は黙つて飲んで、仕事をまといつていれば良かつたんだ。」

「あれがお密さんから私へのメッセージだつたんじゃないですか? 私のことが好きだつて?」

「好き? なんでそうなるんだ。ここつのは考せむじつなつてやがんだ」

「せんぶつ茶を混ぜて出してこたのが、何で好きって解釈になるんだ」

俺が畠つと、やつは一瞬驚いてから、少し悲しそうな顔をした。

それを見てさすがに反省する。

子供じみた嫌がらせをしてしまつたと。

嫌つてゐることをせきり言わなくともわからせるつたやつた、

悪質ないたづらだったのだから。

しかし悲しそうな顔をして頃垂れるやつの口からでた言葉に俺は悲鳴をあげそうになつた。

「ああ、せんぶり茶だつたんですねか。

私はてつきりあなたの尿だと思って、嬉しくて飲んでたんですね。

あなたの愛だと思って……」

ああ、そういうこいつに接待された同僚が連れてかれたのが、スカロ系のヘルスだつたって言つてたな、そう思いだして俺はその場から逃げ出した。

いたづら？『せんぶつ茶』（後書き）

女性でいう所の、イジリー岡田に使ったスプーン舐められると何感じ？

断崖絶壁、下は川

見覚えのある靴だった。

先が尖ったビジネスシューズ。

褪せた茶色も記憶の中に。

「珍しい靴だね」

私は聞いた。

「そうだね、前に一度履いたきりだね」

あなたは答える。

その愛しい声に見上げても、見えるのは私の左手を踏んだ靴だけ。

ああ、この痛みも覚えてる。

ショックや絶望感よりも、私は記憶の糸を辿るのに必死だった。

でももうそれも限界だった。

もうすぐ私は力尽く。

いや、それよりもあなたの靴が私の左手を蹴るのが先だったか。

断崖絶壁、下は川。

落ちて助かるわけがない。

でもこの微かな記憶が正しいのならば、何故ここに私はいるのだ
わ。

水色の車

屋上から見た景色は、いつもとは違っていた。

たくさんの中が通る大通り。

私は水色の車を探していた。

彼の乗る車の色。

私のもつとも好きな色。

同じような車が通るたびに、私の心はざわつく。

私を轢いて。

そう願う。

一生背負つて、後悔するがよい。

私が負つた心の傷と、同じくらい傷ついて、悩むがよい。

窓から見ていた時に何度もがあつたことが。

毎日、大通りを走るあなたを私は見ていたのに。

ことあるごと、助手席に他の女を乗せて横切るなんて。

遠くの信号に水色の車が止まっているのが見える。

紛れもない、彼の車の色だった。

屋上の柵を乗り越えていた、足がすくんでいる。

それでも手でめいといっぱい身体を押し出して、距離を測る。

あの車に弾かれたい。

後ろのドアが開き、白衣の看護士が現れた。

屋上に吹き抜ける風で何を言っているかは、わからない。

けれど、かき消された声の中に「こまだ、いけ」と聞こえた気がした。

信号が青に変わる。

目標を定め、覚悟を決める。

次の瞬間、私の身体は宙に舞う。

頭から落ちて行き、病室の中の人と目が合った。

私が見たいのは、お前じゃない。

無理やつ身體を反転させると、しっかりと車を見定めた。

助手席にはやはり、女の姿があった。

次の瞬間、世界が暗闇に閉ざされた。

「うわああああ、どうしたら……！」

車を降りて私を見ながら、叫ぶ彼の声に目を開ける。

それは初めて聞いた彼の声だった。

壊れかけた聽音を通して、胸に深く沈み込んでゆく。

この声に、名前を呼ばれたい。

私はそう願った。

死にたくない。

私はそう思つた。

かすむ視界の中、私は彼を見つけ、全身の力を振り絞り立ち上がる。

「きよ……う……！」……」

声が出ない。

それでも必死だった。

「し……にたく……ない」

責めた彼が固まり、膝を床につける。

車を降りて、駆け寄る人々に先を越されまいと、彼にしがみつく。震える彼の耳元で、呼んでほしいと願う自分の名前を伝えようと口を開いた瞬間、大量の血が彼の顔にかかる。

「ひああああああーーーー！」

叫ぶ彼の耳元で、私はずっと自分の名前を刻み込ませた。

変わらないもの

「こんな最低男と、やっていたなんて考へると吐き気がするわ

それが彼女の最後の言葉だった。

無職の居候の身で、別れることになつても、すぐにはいなければ、
からつた。

だから毎日、彼女に何を言われても、僕は我慢していた。

この寒い中、廊下で寝ることを強制されても。

風邪をひいて咳をしていた時に、つるといからと外に圧迫されても。
でもこの言葉だけは、我慢ならなかつたのだ。

次の瞬間、僕の手は彼女の首を絞めていた。

殺そうとか、考えていたわけではない。

ただこれ以上、傷つけられる言葉が口からでてくるのが怖かつた
のだ。

両手の力を振り絞つて彼女の首を絞めたとき、凄い力で僕の腕に
爪を立てた。

でもそれは、夜の行為のときに、彼女が僕の背中に爪を立てるときを連想させた。

もう一ヶ月以上、同じベットで寝かせてもらっていない。

彼女に最後に背中に爪をたてらてたのは、一体いつのことだったか。

気が弱くおとなしく、いつも言いなりだった僕が、唯一彼女の優位にたてるのはベットの中だけだった。

身体中から力が抜けて、僕に身を預ける彼女を僕は「とおしく感じた。

完全に彼女が動かなくなるまで、必要以上に首をしめてから、僕はゆっくりと手を離す。

でもそれでも怖かった。

彼女がもし息を吹き返したら、今度は何を言われるのだろう。

僕は廊下にたてかけてあつたギターケースを持つてみると、べつたりした彼女の顔面を下から、たたきあげた。

愛しいものを見る優しい目が、さげすみの目に変わってしまったことを嘆きながら。

厳しいことを言つてもどこかに愛情のあることを言つていた口が、人格を否定することしか言わなくなってしまったことを嘆きながら。

全て何もかもなくなるまで。

その日の夜、一ヶ月ぶりに入ったベッドの中は、彼女の匂いでいっぱいだった。

唯一変わらない、その匂いに包まれて、僕はほんの少しだけ泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2190n/>

ショートショート他

2011年10月6日17時11分発行